

立ち読み版



Interview

シブサワ・アンド・カンパニー代表取締役
commons投信取締役会長

しぶさわ けん
渋澤 健さん

1961年神奈川県逗子市生まれ、1969年から米国で暮らす。1983年テキサス大学卒、1984年日本国際交流センター入職。1987年UCLAのMBA修了、ファースト・ボストン証券入社。1988年から東京のJPモルガン銀行、JPモルガン証券などを経て2001年独立、シブサワ・アンド・カンパニー設立。2008年commons投信設立。「日本資本主義の父」と言われる渋沢栄一の玄孫。著書に『33歳の決断で有名企業500社を育てた渋沢栄一の折れない心をつくる33の教え』（東洋経済新報社）、「SDGs投資 資産運用しながら社会貢献」（朝日新書）など多数。

【取材・文】 神原哲也

日本記者クラブ会員。中小企業診断士。MBA。認定経営革新等支援機関。1982年、早稲田大学法学部卒業後、日本経済新聞社に記者として入社。専門は経済、経営。日経・テレビ東京・テレビ大阪の編集・報道部門、日経本社経営部門を経て、2017年に独立。老舗・ファミリービジネスの「永続経営」や「人を大切に生きる経営」の研究者。

【写真】 田中和弘

玄孫が読み解く 「日本資本主義の父」・渋沢栄一

Interview >>> Ken Shibusawa

Introduction

渋沢栄一は、1873年に日本初の銀行を創立するなど、それまで日本になかった株式会社をおよそ500社設立、有力企業に育てたことなどから、「日本資本主義の父」などと評される。近代日本経済の基礎を築いた立役者である。2019年には福澤諭吉の後の1万円札の肖像に決まり、2021年放送予定のNHK大河ドラマの主人公でもある。

渋澤健さんは米国育ちで、JPモルガン証券など外資系の証券会社などでキャリアを重ねてきたが、高祖父の渋沢栄一を研究、多数の著書も発表している。時代を超えて「時のひと」になった渋沢栄一の読み解き方から、ステークホルダー資本主義とこれからの経営について話を聞いた。



「栄一の言葉」は今も通用する

神原：渋沢栄一についての学びの経緯を聞かせてください。

渋澤：私は小学校2年から大学までアメリカで暮らし、母方の叔父の財団に入りました。その後、米国でMBAを取得、ウォール・ストリートに入ってから独立するまで、20代後半から30代までは証券会社やヘッジファンドという金融資本主義のと真ん中にいた人間です。

2001年、40歳になったときにシブサワ・アン

ド・カンパニー株式会社を設立しました。そのとき、（高祖父は）500社ぐらいの会社を創ったと言われているので何か参考になることはないかと思ったのです。父方の叔父からは「渋澤家には家訓があり、政治と株はやっぱりいかん、と書いてあるんだぞ」といつもお説教をくらっていたので気になっていました。

調べると「投機の業または道徳上卑しい職に従事すべからず」と書かれていました。叔父は、「道徳上卑しい」は政治、「投機」は株と言い換えていたんですね。道徳上はシロですが、短期売買の繰り返し返しの仕事をずっとやってきました。40歳になって初めて家訓違反に気づいたのです。私にとってはきわめて「不都合な事実」でした。ですが、そのときに初めて、栄一はたくさんの言葉を残していることに気づいたのです。日本での私の最終学歴は小学校2年ですので、栄一の資料はまったく読めません。（米国在住の）父の力を借りました。

神原：どのような印象を持ちましたか。

渋澤：栄一は丸い顔をして優しいおじいさんのイメージですが、残されている言葉からまず感じたことは、「かなり怒っているぞ」ということです。このままではダメだ、もっと世の中を良くしなければいけない、という気持ちが伝わってきました。また、その言葉は今の世の中にも通用すると思いました。そこで昔の言葉を今の言葉にかみ砕いて、ブログに書いてみようと思ったんですね。そこから研究が始まり、執筆や講演をやるようになりました。

投資信託は「合本主義」

神原：投資信託をやられていますね。

渋澤：シブサワ・アンド・カンパニー内の準備会社としてcommons投信を立ち上げました。投信は、私が昔やっていたこととはまったく違って長期投資。毎月1万円から子どもや孫のために積み立てていきたいと思いますという投資です。日本で積み立て投資をやっているのは、さわかみ投信（1996